

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.100

100 MAGAZINE ANNIVERSARY!

巻頭特集
vol.100 記念

日本ファルコム株式会社
代表取締役社長

近藤季洋氏インタビュー！



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



近藤 季洋社長 インタビュー

interview

月刊ファルコムマガジンが今号で100号を迎えたことを記念し、日本ファルコムの近藤季洋代表取締役社長にインタビューを敢行！
ファルコムマガジンの印象深かった作品について尋ねてみたほか、当時の日本ファルコムの思い出。
そして現在開発真っ只中の最新作『イースⅨ』の開発秘話。
そして、今後のファルコム作品についても詳しくお話を伺った！

interview

──vol．1は2010年1月27日発売です。そこから今号で月刊ファルコムマガジンがvol．100を迎えました

近藤社長（以下：近藤）　よく続きましたよね（笑）。どんなメディアでも10年近く続けるっていうのは大変ですからね。ちょっと前のような感じもしますし、「そんなに経つの？」というのが正直なところです。

「やっぱりこっちの方が良かったんじゃないか？」って思ったりもしました（笑）

──ファルコムマガジンから生まれたファルコムBOOKSも、累計30冊以上刊行されています。特に印象に残っている作品はありますか？

近藤　どれも印象深い作品ではありますが、やはり新久保だいすけ先生の「ファルコム学園」シリーズはアニメ化もされたこともあり印象深いですね。『イースvs空の軌跡』でも4コマ漫画を描いていただいていましたが、当時ゲームを開発している時に、シナリオを真面目なものでやるかギャグでやるか悩んでいたんですよね。最終的には真面目な方でやったのですが、もしギャグでやっていたらこうだったんじゃないかというのがファル学なんですよね。ファル学を読んだ時に「やっぱりこっちの方が良かったんじゃないか？」って思ったりもしました。結果論ですけどね（笑）。これはもちろん、新久保先生が上手い！　のひと言です。啄木鳥しんき先生の『空の軌跡』シリーズも長いですよね。ファルコムBOOKSではありませんが、『審判の指輪』は僕がたしか原案を考えたものを、啄木鳥先生に膨らませていただいた作品で、思い入れは深いです。トヴァルも今やレギュラー的存在になりました。『審判の指輪』は当時ドラマCD化もされ、杉田智和さんにトヴァルを演じていただくことになり、「やっていいただけるんだ！」と喜んだ記憶があります。

小説作品の方もたとえば『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』などは収録現場でも打ち合わせをしていたのを覚えています（笑）。小説作品は僕たちができない発想を作家の方たちが描いてくださるのでとても面白かったです。『英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク』のキャラクターの入れ替わりなどもそうですよね。あとは原作にはないキャラクター同士の掛け合いを描いていただいて。『午後の紅茶にお砂糖を』のダドリーとキーアのお話などはとてもよく覚えています。「そうくるんだ！」って。

原作ゲームは本筋をメインでやっていかないとまとまりがつかないものになってしまうため、やりたいと思っていたことを諦めてしまうことも多いのですが、そこを小説は補完していただけるのでおもしろいですね。『魔法少女まじかる☆アリサ』なんかも、もともと本当は



みんな集まれ！ファルコム学園
漫画：新久保だいすけ

interview

自分たちでミニゲームを作りたかったぐらいで、実は横スクロールアクションで作りかけていたのですが……（笑）。あぁいう形でまとめていただいてとてもうれしかったです。

ファルコムの中ではまさしく〝動乱〟の時期でした

――2010年は『英雄伝説 零の軌跡』がリリースされた年でもありました。ファルコムの9年間を振り返ってみていかがですか？

近藤　当時は『零の軌跡』がコンシューマー機で初めての『軌跡』シリーズだったので、「ファルコムもいろいろやってみようよ」と社内がなっていた頃ですね。新しくファルコムに入ってきた社員も、パソコンの時代を知らない人が多くなってきました。そう考えると9年って長いですよね。『零／碧の軌跡』が好きでファルコムに入りたいっていう方たちが今入ってきています。あの頃はまだ「コンシューマーで本当にやっていけるのか？」と不安定な時期でもありました（笑）。コンシューマーをメインにしていくというのは、私が代表になって一番最初の大きな判断だったので思い入れが深い時期です。『軌跡』シリーズも『空』が終わり新たに展開していくにあたり、安定感のあった『空』から新しいシリーズに切り替えるということも不安でした。はたしてついてきてくれるのかなと。しかも続編はコンシューマーですからね。『零』は思い切って世界観も見直したりしていたので社内からも反発が出たりと、ファルコムの中ではまさしく〝動乱〟の時期でした（笑）。2009年の『イースSEVEN』もそういう意味では同じですね。あそこで『イース』がパーティー編成タイプのアクションRPGに変わって。でも今振り返ってみると、その頃に築いた基礎が今の土台になっているのかなと思います。



英雄伝説 零の軌跡
2010年9月30日発売

「アクションゲームとして新しくどういうことをやりたいのか？」をスタート地点に

――そして今年は最新作『イースⅨ』の発売が予定されています

近藤　『イースⅨ』は前作の『Ⅷ』がすごく多くの人に受け入れていただいたのですが、それと真っ向勝負したらダメだと思いながら開発しています。『Ⅷ』がヒットしたことで、スタッフがそれをどう越えようかということを考えてしまっていたんです。その時点で新しい『Ⅸ』に取り組む土台を見失ってしまう気がして。たとえば「ダーナはこうだったから今回はこう」、「ふたりの主人公がいたから今回はどういう風にする？」というようにですね。そういうスタートは良くないと思い、『Ⅷ』は一度忘れて、「アクションゲームとして新しくどういうことをやりたいのか？」ということをスタート地点にしました。するとスタッフから今までやってきていない要素として、平面やジャンプだったアクションを、もっと進化させて垂直方向のアクションを取り入れたいという意見があったので、それを実現するために必要なものはなんなのかというところから発想を広げていきました。垂直方向に飛んだり、壁を走ったりというのは『イース』の中ではかなり突飛な設定なので、それが許される世界観とはどんなものなのか、何が必要なのか、というようにですね。今回登場する怪人などもそうです。またそのアクションを活かすためには人工物の方がいいだろうということで舞台も都市となりました。『Ⅷ』までの良かった点を引き継ぎつつも、また違った別のものをお見せできるかと思っています。垂直方向が加わることでどうしてもゲームの難易度は上がりがちになってしまうので、それをどう『イース』らしく、シンプルで爽快で初心者でも遊べるようにするのかというところは最後まで悩むんじゃないかなと思います。実は裏話として、開発をスタートする際に『Ⅴ』をやろうか、という話も出たのですが、全会一致で新しいものに挑戦したいということになりスタートしています。さらに今回は、物語のスタート地点も今までとは違っているので、そこも楽しみにしていただければと思います。



イース IX -Monstrum NOX-
2019年9月26日発売予定

――最後に読者にメッセージをお願いします

近藤　ファルコムマガジンが始まった時期というのは最初にもお話ししたとおり、ファルコムの中でも大きな動きがありました。その頃に作り上げたものが今の礎になっているんですけど、『イースⅨ』は『SEVEN』から始まったパーティーシステムの、ある意味集大成的なものになりそうです。ここから先は、『軌跡』も『イース』も新しいことを取り入れていかないといけないんじゃないかなと。それがまた、これからの10年の礎になるといいなと思っています。新しく始まっている軌跡もそのような意識で今絶賛準備をしていますので、ここ2～3年の間の、それこそ東京オリンピック前後のファルコムがリリースしていく情報やタイトルに注目していただければうれしいです。ご期待ください！

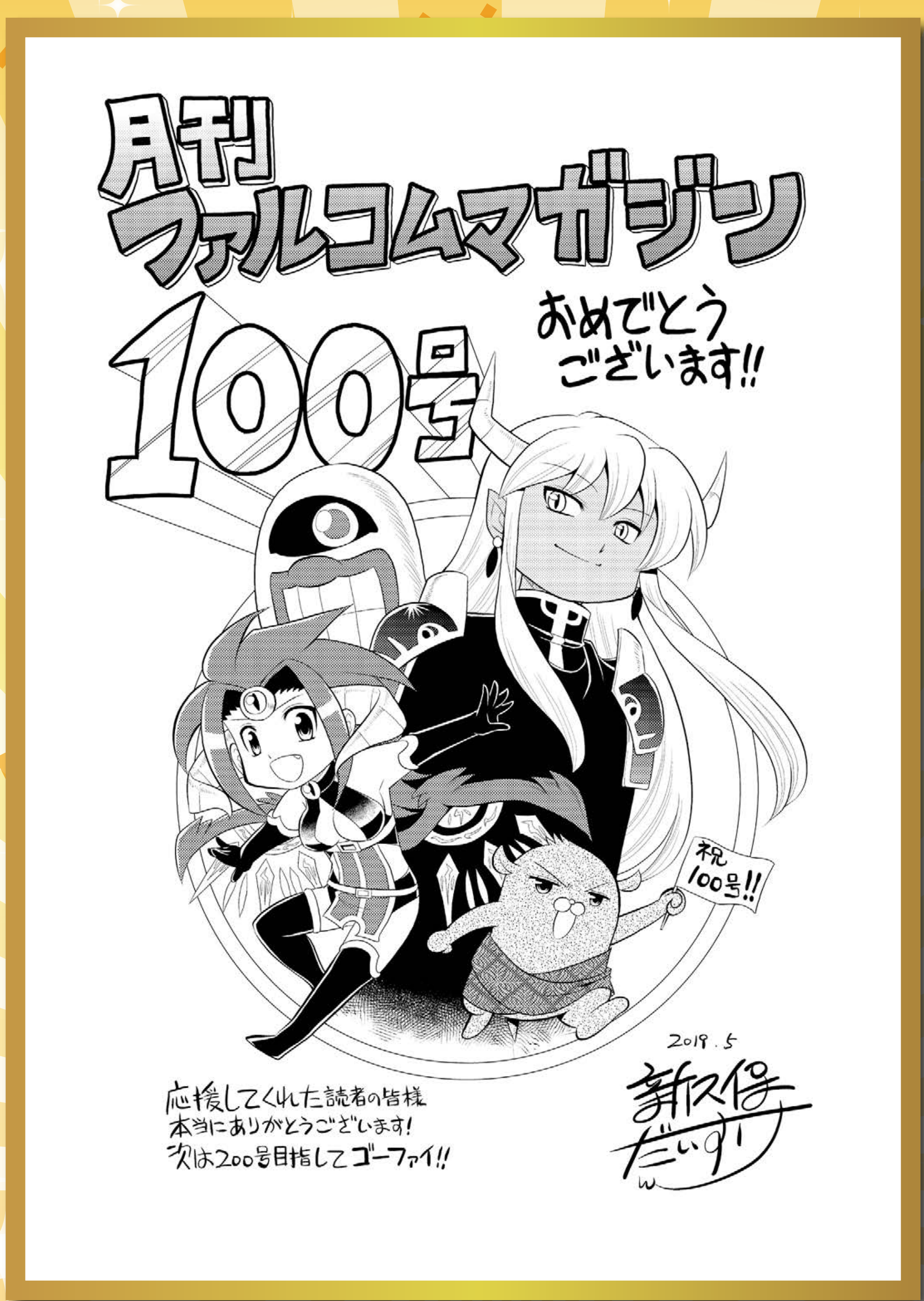
こんどうとしひろ
近藤季洋

日本ファルコム株式会社代表取締役社長。ゲームの開発などを経て、2007年に社長に就任。現在もプロデューサー、ディレクターとして、自らゲーム制作に携わっている。

月刊ファルコムマガジン 100号記念 イラストメッセージ



さがら梨々
英雄伝説 閃の軌跡
魔法少女まじかる☆アリサ



新久保だいすけ
みんな集まれ!ファルコム学園
も〜っと集まれ!ファルコム学園

創業者の加藤が
「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」
と言ったのを覚えています。　――――近藤季洋

FB ファルコムBOOKS



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載！

- 日本ファルコム代表取締役社長：近藤季洋
- OVA版『英雄伝説 空の軌跡』アニメーション監督・演出家：橘正紀
- OVA版『英雄伝説 空の軌跡』脚本家：上江洲誠
- ファルコムjdkバンド ボーカル：小寺可南子　ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に！



Falcom Long Interview
ファルコムロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格：1,155円（税込）
ISBN:978-4-89610-232-1

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp



啄木鳥しんき　英雄伝説 空の軌跡 SC ～絆の在り処～



序文

自分ではない何者かになる。
そんな夢を見たことがあるだろうか？
その夢の中で私は考える。
これは自分なのか、自分ではないのか。
夢が現実なのか、現実が夢なのか？
私が辿り着いた答えはひどく単純だ。
『どちらでもいいではないか』
どちらが真実なのか——ではない。
どちらも真実なのだ。
〜『バルドゥークの檻』本文より〜

**アドルほかメインキャラクターのキャストが発表！
さらに物語を彩る新キャラクターも続々登場！**

『イースIX -Monstrum NOX-』

『イース』シリーズ最新作『イースIX -Monstrum NOX-』。今月はアドルやドギのほか、メインキャラクターたちのキャスト情報が発表！　さらに、新キャラクターや新《異能アクション》の情報も続々到着!!

タイトル：イースIX -Monstrum NOX-　**ジャンル**：アクションRPG
対応機種：PlayStation®4　**発売日**：2019年9月26日予定
プレイ人数：1人　**CEROレーティング**：審査予定

2019年 9月26日 発売！

アドルやドギのキャスト情報が到着!!



ドギ
CV：三宅健太



アドル・クリスティン
CV：梶裕貴



鷹
CV：石川界人



白猫
CV：小松未可子

※画像は開発中のものです。

怪人《人形》 CV：鈴木愛奈

攻撃スタイル：スウィープソード＆ワイヤードシックル

一流の職人が手掛けた、美しい人形のような風貌を持つ怪人で、人間には捉えることのできない“不可視”の物体を認識する異能を持つ。
その出自については全くの不明でバルドゥークの怪人たちの中でも特に謎が多く、戦闘では人間には不可能と思われる奇怪な動きで立ち回る。













怪人《猛牛》 CV：佐倉綾音

攻撃スタイル：戦槌

純粋な“力”の能力に秀でた怪人で、巨大な戦槌を振りかざした豪快な戦いを得意とする。
白猫や鷹のように犯罪を犯すこともなく、怪人たちで言い争いになると間に入って場を取り持つなど、かなりの良識派。
血縁者が監獄都市で暮らしているという噂もあるが、真実は定かではない。













怪人《背教者》CV：下野紘

攻撃スタイル：？？？

ボロボロの法衣を着崩したような奇抜な恰好をしていることから《背教者》と名付けられている怪人。厭世的な気質が強く、人前で姿を見せる機会も少ないため実際に彼の姿を見たというバルドゥークの住民はほとんどいない。
グリア地方や監獄都市バルドゥークの歴史について何らかの知識を有しているようだが…

「ただ呼び出されては戦う……そんな傀儡のような存在さ。」





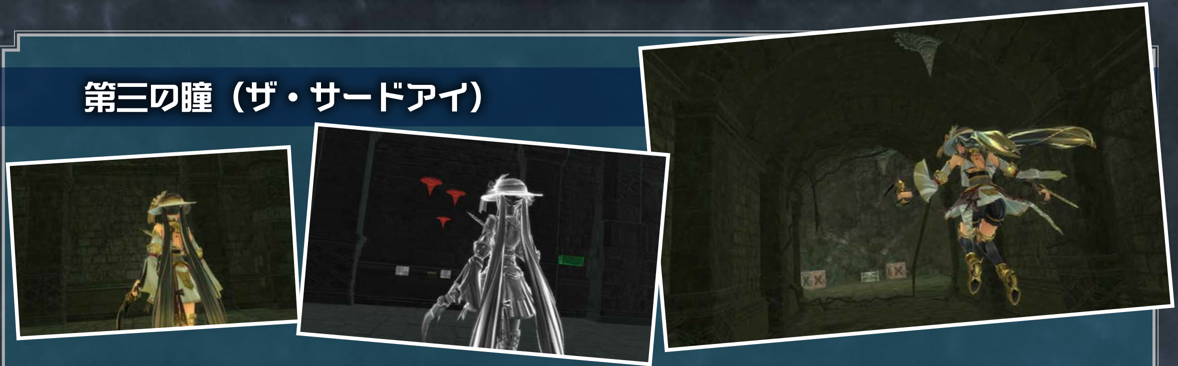


新たな《異能アクション》の情報も到着！

《異能アクション》とは？

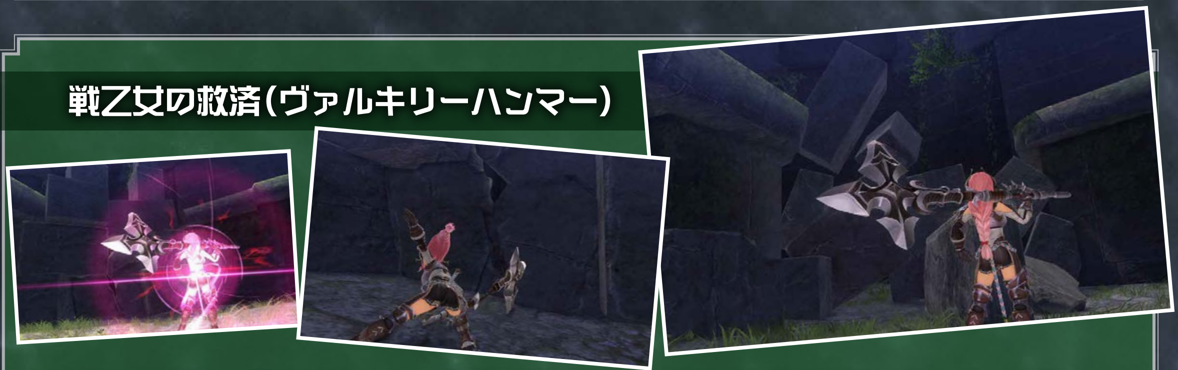
怪人たちが持つ超常的な力《異能》を発動させることができる、今作独自のアクション要素。
街中、フィールド、ダンジョンを問わず、あらゆる場所で発動することができ、敵とのバトルだけではなく、ダンジョンのギミック解除や探索でも大活躍するとのこと。また《異能アクション》はバルドゥークに出現する《怪人》の協力を得ることで、どんどんと増えていくようだ。

第三の瞳（ザ・サードアイ）



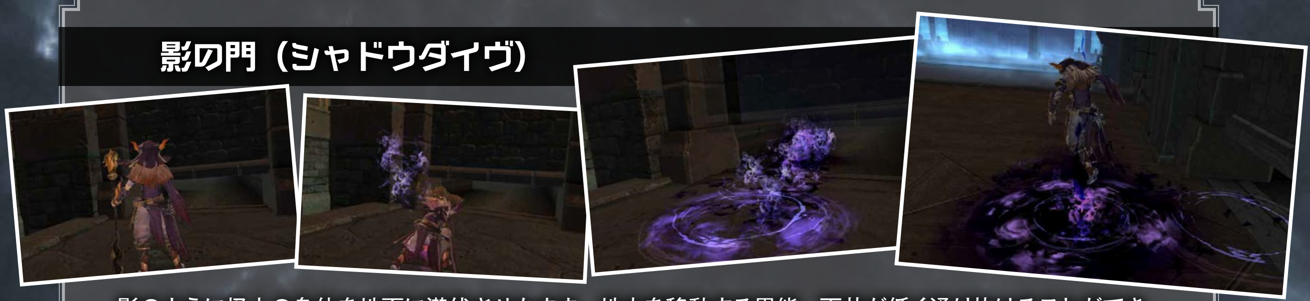
人間の目には映らない物体・現象を一時的に可視化する異能。不可視の敵との戦闘で効果を発揮するほか、壁を透視することで隠された通路や宝箱を発見したりと探索面においても様々な活用方法がある。

戦乙女の救済（ヴァルキリーハンマー）



力を込めた気合の一撃で頑丈な岩壁を破壊する異能。石を積み上げたような簡素な壁、亀裂の入った岩壁などを破壊して新たなルートを開拓することが可能になる。一部の敵に対しては強固なガードを崩す効果も持つ。

影の門（シャドウダイヴ）



影のように怪人の身体を地面に潜伏させたまま、地中を移動する異能。天井が低く通り抜けることができない通路であっても、この異能を発動させることで突破が可能となる。潜伏中は敵に気づかれることもないため、この能力を利用して敵の背後に回ったり、強敵との戦闘を避けて移動するといった活用法も。

★魔女と魔女っ子は、ザナドゥとファザナドゥくらい違う★





帰らぬ者達



あの日の私のように



閉め出された時は



次元を超えるもの



魔法少女の里



セカンドシーズン



集う美少女たち



魔法のグッズ



アミノ酸とカタボリックのバンパイア



ハックの良心



誇張する真実



次元の果てに





刻は至った
これより「福音計画」の第三段階を開始する
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


…以上がこれまでの顛末と《方舟》潜入時に掴んだ情報です
「福音計画」の全貌を明らかにすることはできませんでしたが
《結社》はすでに次の行動を開始しています


連絡を受け
全王国軍部隊に
第一種警戒態勢が
発令されました
また飛行艦隊を
王国全土の哨戒に
当たらせております
エステルさん
ヨシュア殿
本当に
ご苦労様でしたね
貴重な情報を
よく知らせて
くれました
いいえ!
当然の報告を
しただけですし…
いいえ
正直もっと
早い段階で
伝えるべき
でした
空賊艇強奪の
件も含めて…
本当に申し訳
ありませんでした

裁きを受ける
覚悟は
出来ています
ふむ…
陛下
いかが
いたしますか?
……
そうですね


では…超法規的措置になりますが
今回ヨシュア殿が明らかにした結社に関する様々な情報
それをもって過去の行為は不問としましょう
……
ですが…
もし…
貴方が今すぐ自分の罪を罰して欲しいと言うのならば…
牢に投獄されることで貴方の気が済むと言うのであれば
そうしましょう


でも
そういうことではないのでしょう?
貴方のしたことは貴方自身が一番よくわかっている
だとしたら今すべきことを
正しく真っ直ぐにやり抜いてください
それでも貴方にはここでやらねばならないことがあるのではありませんか?
それが己の過去に報いるただひとつの方法だと
…わたくしは思っています


はい
ありがとうございます
…いいえ
礼には及びません
この程度の裁量
《ハーメル》の遺児たる貴方への償いにもならないでしょうから
え…？


償いって……
ヨシュアに？
女王様が？
陛下 それは…
…先の戦争で エレボニアが リベールに 宣戦布告を 行った時
その理由として
ハーメル村の虐殺が 王国軍によって 起こされたという 断固とした指摘が なされていた


だが
終戦間際
帝国軍は
突如として
その指摘を撤回し
即時停戦と講和を
申し出てきたのだ
ハーメルの一件について
一切沈黙することと
引き換えにな
…帝国内部で
どんなことがあったのか
想像はつきました
しかしこのまま
戦争が長引けば
王国は再び窮地に
陥ることになる…
そう判断した
わたくしは
帝国の条件を
呑むことに
決めました
しかし
それは
同時に
真相の追求を
放棄したと
いうこと——
あなたに
俺を
あわれむ
資格などない
わたくしは
自国の安寧を
優先して
背後にいるはずの
被害者たちの
無念を
切り捨てて
しまったのです


…どうか
ご自分をお責めにならないでください
そもそもハーメルの虐殺には何の関わりもない上に
自国の平和がかかっていたのです
国王としては当然の判断でしょう
ヨシュア殿…
この…リベールという国は
僕の凍てついた心を癒してくれた
第二の故郷ともいうべき地です


その地を救った陛下のご決断と
守り抜いてくださった
この国の人たちに…
感謝こそすれ
恨みなどしません
……
…ありがとう
ん？
…どうやらおふたりを独占しすぎたようですね

次回に続く

『英雄伝説 空の軌跡FC』
ノベライズシリーズ

ついに完結!!

英雄伝説 空の軌跡

3 王都繚乱



正遊撃士になるため、リベール国内の各都市を巡っていたエステルとヨシュア。その旅路の中、失踪していたはずの父・カシウスから漆黒のオーブメントが届く。ふたりは父の行方と導力器の正体を探るべく天才導力学者ラッセル博士を擁する工房都市ツァイスへと向かうのだが……。



英雄伝説 空の軌跡
2 黒のオーブメント
価格：1,200 円+ 税



英雄伝説 空の軌跡
1 消えた飛行客船
価格：1,200 円+ 税

既刊シリーズも
好評発売中!!

2017年
好評発売中!

原作：日本ファルコム（『英雄伝説 空の軌跡』）
著：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ

価格：1,400 円+税
ISBN:978-4-8021-3067-7



《剣帝》レオンハルトとともに現れた、古竜レグナートの暴走を抑えるために奮闘するエステルたち遊撃士一行。その頃、復讐者となったヨシュアはカプアー一家の助力を受け、静かに結社《身喰らう蛇》へと迫りつつあった……。名作RPGのコミカライズ、迫真の第3巻！







著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3124-7

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「イースⅨ」発売記念！　DLCフルセット入りお買い得版『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス』2019年6月20日（木）発売!!



シンプルかつ爽快なパーティバトル、バトルを盛り上げる熱いBGM、漂流者と共に拠点を発展させていく「漂流村」など、その完成度の高さと独自のシステムで新規ユーザーからも高い評価を受け「PlayStation® Awards2017ユーザーズチョイス賞」を受賞した「イースⅧ」。
2019年、その「イース」シリーズの完全新作となる『イースⅨ -Monstrum NOX-（モンストルム・ノクス）』の発売決定を記念して、「イースⅧ」をお買い得価格に設定したPlayStation®4用タイトル『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス』が新登場!

全22アイテム全部入り!初回特典「イースⅧ コンプリートDLCパック」

PlayStation®4版のラクシャ専用衣装「エタニアン・スカラー」や序盤～中盤の戦闘が有利になる装備アクセサリ、回復アイテム、強化用素材など、PlayStation® Storeで配信中のDLC全22アイテムが丸ごと手に入るプロダクトコードを初回生産特典としてパッケージに封入!



■商品概要：
タイトル：イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス
ジャンル：アクションRPG ／対応機種：PlayStation®4
発売日：2019年6月20日（木）／価格 :パッケージ版:4,800円（税抜）／ダウンロード版:4,500円（税込）
※商品内容は2017年5月25日に発売された『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』と同一のものです。
■『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』公式サイト　https://www.falcom.co.jp/ys8_ps4/
■『イース』シリーズポータルサイト　https://www.falcom.co.jp/ys_portal/

2年半ぶり入魂の完全フルアレンジアルバム『YsⅧ SUPER ULTIMATE』5月31日（金）発売!!



アクションRPG「イース」シリーズ最新作「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-（ラクリモサ・オブ・ダーナ）」より、劇中使用曲の中から特に人気の高い楽曲を厳選し、全曲新アレンジ、新録音を行ったフルアレンジアルバム『YsⅧ SUPER ULTIMATE（イースエイト スーパーアルティメット）』が5月31日から一般販売開始！　DL版、ハイレゾ音源版は各音源配信サイトにて好評配信中です。

【参加アーティスト】
佐坂めぐみ（Vo）／末廣優里（Vo）／梶川ようこ（Vo）／ ADD（SAX）／古谷光広（EWI）／徳永延生（HCA）／長野昭子（VN）／山岸孝教（VC）／井上央一（G）／寺前甲（G）／目純一郎（B）／榎本敦（B）／和田耕平（B）／シゲ山本（KEY）／堀川晃弘（KEY）他

【発売日】2019年5月31日（金）
【価格】CD盤:2,800円（税抜）　DL版:2,400円（税抜）／単曲:250円（税抜）
ハイレゾ版：3,000円（税抜）／単曲：350円（税抜）
※ DL版、ハイレゾ版は2019年5月10日（金）より好評配信中。

■音楽配信サイト
《iTunes® Store》http://itunes.apple.com/jp/artist/id120174391
《Amazon デジタルミュージック》http://j.mp/VSjC6N
《mora》http://mora.jp/artist/299183/all
《music.jp》http://music-book.jp/music/Artist/141849/Album

■ハイレゾ版音源配信サイト
《『e-onkyo musi c』》http://www.e-onkyo.com/search/search.aspx?label=Falcom
《『mora』ハイレゾ配信ページ》http://mora.jp/artist/299183/h#discArea
《『music.jp』ハイレゾ配信ページ》http://music-book.jp/music/Artist/141849/hiresoalbum
※ハイレゾ音源版は全曲96kHz ／ 24bit(WAV & flac) となります。

【Ys Ⅷ SUPER ULTIMATE 収録曲】
1. SUNSHINE COASTLINE
2. Hope To You
3. LOST IN GREEN
4. 流れ行く夜を超えて
5. GENS D' ARMES
6. Everlasting Transeunt ～永遠の旅人～
7. In Side My Head
8. Dana
9. Theos De Endrogram -Trance Mix
10. Eternal Sunshine
11. 永遠の旅人

「東京ザナドゥ」公式イラストを使用した新商品が続々登場!!
GraffArt SHOP 池袋本店・名古屋店・なんば店にて好評販売中!

A3株式会社が運営をするGraffArt Shop（池袋本店・名古屋店・なんば店）において「東京ザナドゥ」の公式イラストを使用したキャラアクリルフィギュアから全13種類の缶バッジ、通勤・通学にも便利なキャラパスなど新作グッズが続々登場!
「東京ザナドゥ」は今後も新作グッズが予定されているので、『Falcom Base』公式Twitterアカウントから発信される最新情報をお見逃しなく!
対象店舗：池袋本店/名古屋店/なんば店



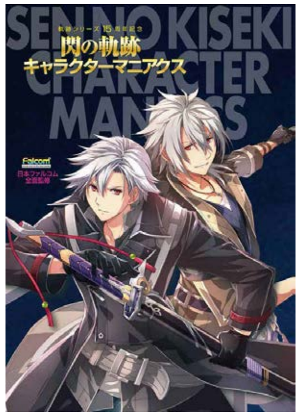


《Falcom Base 公式 Twitter アカウント》
https://twitter.com/Falcom_Base
《GraffArt Shop with A3MARKET ONLINE》
http://kyaragoods.shop-pro.jp/?mode=grp&gid=2012310

要チェック!

『軌跡シリーズ15周年記念 閃の軌跡キャラクターマニアクス』

閃の軌跡マガジン編集部責任編集による、『閃の軌跡Ⅰ～Ⅳ』に登場する1300人以上の登場キャラを網羅した究極のキャラブックがいよいよ発売!　キャラごとの経歴や相関図、最新版ビジュアルギャラリー、人気キャラランキングや新久保先生の4コママンガ企画など、読みごたえも抜群!



発売日：2019年6月24日
価格：4,500円（税抜）
発行：株式会社KADOKAWA
仕様：A4判／352頁

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。５月はメインストーリー第７章第１弾の後編が実装！　そして、第２弾の実装予定も明らかに！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー第７章第１弾「試験班解散／後篇」が実装！



アイリから取引を持ちかけられたクロエ。指定された資料を手に入れなければ“グノーシス”入りのワクチンが患者たちに投与されてしまう。人々の命を守るために《戦争卿》の駒となるか、それとも──。

※次回、第２弾「オルソンの道／前篇」は近日実装予定！

5月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



白の女王・リース

リースは赤の女王の姉妹で心優しい白の女王に。儚げな笑みがなんとも可憐。ちなみに赤の女王とハートの女王は別の人物なので要注意！

白ウサギ・フィー

先月に引き続き「不思議の国のアリス」をモチーフにした衣装が登場！　フィーは時計を片手にいつも大急ぎで駆け回る白ウサギに。白と青の色使いがなんとも新鮮だ。

アンゼリカ・ログナー

『閃の軌跡Ⅱ』からアンゼリカ先輩がついに『暁』でプレイアブルキャラクターに！　ジンやキリカ、ヴァルターと同じく東方の武術《泰斗流》の使い手だ！

ハートの女王・サラ

サラは怒りっぽいハートの女王に。原作では機能的な衣装を着ていることが多かったのでドレス姿は新鮮。高貴な笑みを浮かべる姿はまさしく女王様！

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

2019年は『軌跡』シリーズ15周年！

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

歴代『軌跡』原作
ファルコムBOOKS
試し読み！



『軌跡』シリーズが2019年6月に15周年を迎えることを祝して、ファルコム BOOKS のお試し読みができる特別企画。第5回は、巻頭で近藤社長も印象に残っていると語られた、むらさきゆきや先生の『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』より、ダドリーとキーアのエピソードをお届け！

製品情報

好評発売中

著　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　価：1,100円(税別)

第5話
『ダドリーとバースデーパーティー』

かすかに薬品のニオイがただよっている。
ロイドは特務支援課の仲間たち――エリィ、ティオ、ランディとともにウルスラ病院を訪れていた。
中庭や受付に、いつもより多くの患者や見舞客の姿がある。
「なんだか、あわただしい感じがするな……」
「あれだけ大きな事件だったんだもの。無理もないわ」
エリィの言葉に、ティオもうなずいた。
「……市民だけでなく、警察や警備隊からも大勢の被害者が出ていますから」
「そうだな」
ロイドは先日の大規模な事件を思い出して、しばらく目を伏せた。
ランディが「おっ」と声をあげ、ブンブンと手を振る。
「セシルさん、こんちわッス！」
顔をあげたロイドは、栗色の髪の女性セシル・ノイエスがやってくるのを見つけた。
彼女は病院の看護師チーフという立場で、今もナース服に身を包んでいる。
ロイドとは実の姉弟（きょうだい）のような仲だ。
「こんにちは、セシル姉」
「あら、ロイドじゃないの！　それに、みなさんも……今日は、お仕事？」
「うん。入院しているルバーチェ商会の人たちから話を聞きたいんだけど……できるかな？」
セシルが思案顔になる。
「そうね……何人かは、もう話をするくらいなら大丈夫だと思うわ。念のため、先生に確認してみるけど」
「よかった」
「ありがとうございます、セシルさん」
「……お仕事中にすみません」
エリィとティオが丁寧に頭をさげると、セシルがひらひらと手を振って返す。
「気にしなくていいのよ。これも仕事のうちだから」
「さすがです……」
妙なところで感心するティオだった。
ランディが身を乗り出す。
「セシルさん、お仕事、大変そうッスね！」
「ぜんぜん平気よ、と言いたいところだけど……これだけ患者さんが増えるとね」
「俺でよかったら気晴らしに付き合いますよ！」
「ラ、ランディ、なに言ってんだ……⁉」

ロイドは女性関係に奔放な友人の襟をつまんで、猫つかみで引っ張る。
セシルは笑っていたが、エリィとティオはいつものようにジト目になっていた。
「まったく、ランディは……」
「……ダメダメですね」

案内してくれるセシルについて行き、まずは担当医師の部屋に向かう。
その途中で、彼女がうれしそうに教えてくれた。
「今朝、先生がおっしゃってたんだけど……症状が軽い患者さんのなかには、そろそろ退院できる人もいるのよ。警備隊の方とか」
「そうなんだ。よかった」
「ふふ、本当にね。リハビリはしてもらう必要があるけれど、ちゃんと元通りに回復できるらしいわ」
「なるほど。それなら……あ……」
廊下で、見知った相手とすれ違う。
軽くウェーブのかかった金色の髪に、エメラルド色の瞳の女性だった。
一瞬、目が合ったかと思ったが、相手は気づかなかったかのように通り過ぎてしまう。
警備隊の制服ではなく病院服を着ていたから、すぐにはわからなかったが、彼女は――

振り返ると、ランディが気まずそうな顔をして肩をすくめた。
「ランディ、今のは、ミレイユ准尉だよな?」
「ああ、そうだな……」
「声くらいかけたらいいんじゃないか？　その……親しくしてるんだろ?」
「なあに、元同僚ってだけさ……まぁ、あいつは、これしきのことで参っちまうほどヤワじゃねえから心配するな」
「そうか……ランディがそう言うなら……」
金色の髪の女性は、廊下の先にある扉へと入っていた。
オホンッ、とエリィが咳払いする。
「レディがシャワー室に入るのをじっと見てるなんて、恥ずかしいことしないの」
「えっ!?」
ロイドは赤面し、そんなつもりはなかったと釈明するのだった。



担当医師の許可を取ってから、ルバーチェ商会の者たちの話を聞き、知り合いを見舞って、受付へと戻ってきた。

「ありがとう、セシル姉。助かったよ」
「どういたしまして。ところで、もうすぐお昼だけど、ロイドたち、ご飯（ランチ）はどうするの？」
「とくに決めてなかったけど……」
「私、そろそろ休憩の時間だから、よかったら一緒にどうかしら？」
「そうだね」
「おっ、いいッスね！」
　ランディが話に乗って、エリィとティオも異存はなさそうだ。
　それでは、とウルスラ病院にあるオーベルジュ《レクチェ》へ向かおうとした。
　そのとき――
「む、特務支援課か」
　精悍な顔つきと、黒縁のメガネが印象的な、いかにも几帳面そうな男性が、ロイドたちのほうへと歩いてくる。
　肩幅のある身体を背広（スーツ）に包んでおり、きちんとネクタイまで締めていた。
「あ、ダドリー捜査官！」
　やってきたのは、クロスベル警察の捜査一課に所属するエリート捜査官、アレックス・ダドリーであった。
　ティオが「……メガネスーツです」とつぶやき、ジロッと睨まれる。

「ふん。バニングス、またなにかあったのか？」
　詰問するような口調だが、べつに疑っているとか怒っているとか、そういうことではなく、これが彼の地である。
　ロイドは苦笑しながら頭をかいた。
「いえ、先日の事件の経緯を詳しく報告するために、関係者から話を聞いてるだけで……とくに変わったことは起きてません」
「そうか。ならばいいのだがな」
「はは……いくら俺たちでも、そうそう大きな事件に当たったりはしませんから」
「そう思うのなら、お前たちが、ここ数ヶ月で解決してきた事件の報告書を見直してみることだ」
「報告書ですか……？」
「いくつもの大きな事件を解決していることを……忘れたわけではあるまい」
　ダドリーは仏頂面のままだったが、どうやら、支援課のことは評価してくれているらしい。
　ティオが「……ツンデレです」とつぶやき、また睨まれた。
　ロイドたちは苦笑する。
「えっと……ダドリー捜査官は、なにかあったんですか？」

「当然、仕事で来たのだ。詳しいことは捜査上の機密だから教えることはできないが……それより、お前たちはまだ病院に用事があるのか?」

「いえ、もう終わりましたけど……」

「そうか。であれば、早く次の支援要請に取りかかることだ……私は特務支援課の成果をあるていど評価している。成果をあげた者には実力があると判断する。そして、実力がある者は、さらなる成果をあげるべき――というのが私の考えだ」

「な、なるほど……!!」

　元々生真面目なところのあるロイドは納得してうなずいた。感銘を受けたと言ってもいい。

　しかし、マイペース派のランディは、ため息で応じる。

　ティオも「……回し車のなかを走るハムスターみたいです」とこぼして、またダドリーに睨まれてしまった。

　ダドリーが号令する。

「まだこの街《クロスベル》は多くの問題を抱えている。お前たちは実力を示した。であれば、相応の働きをするのが義務だ!」

「は、はい!!」

　追い立てられるように、ロイドたちはウルスラ病院を出る。

　セシルが手を振って見送ってくれた。

「お昼は、また今度ね。がんばって、ロイド。みなさんも」

「はは……ごめんね、セシル姉。また来るよ!」

「くぅ~、セシルさんとのランチが……」

　ランディがこれ以上なく肩を落としていた。

　バス停に向かう途中――

　ティオが唇を尖らせる。

「……支援要請に応えるのは望むところですが……ツンデレメガネスーツは堅物すぎます」

「仕方ないわね。お昼はクロスベル市内で取りましょう」

　エリィがなだめる。

　ロイドも、ひさしぶりに会ったセシルとの昼食は残念だったけれど――ダドリー捜査官の職務に打ちこむ姿に、尊敬の念を抱いていた。

「俺たちも全力を尽くしてるつもりだけど、ダドリー捜査官は本当にすごいと思うよ。兄貴とは違った意味で目標だし、学ぶべきところも多い」

　エリィがうなずいた。

「そうね……ロイドのお兄さんも、とても仕事熱心だったんでしょう?」

「うん。仕事なのか遊びなのか、わからないようなときもあったけど」

「ふふ、型破りな人だったみたいね」
「今にして思うと、あれは情報収集だったのかな。ときどき兄貴はカジノやバーで盛りあがって朝帰りして、セシル姉に心配されてたよ」
「そういえば、ロイドのお兄さんと、セシルさんは……」
　エリィの表情が、わずかに陰る。
「ああ……」
　ロイドの兄ガイ・バニングスと、セシルは婚約していた。
　そして、彼女は今でも亡くなったガイのことを想いつづけているようだ。
　ロイドは青い空を見上げる。
「俺は、いつか兄貴に追いつけるのかな？」

　くいっ、とダドリーはメガネを直す。
　ロイドたち特務支援課を見送っていた看護師――セシルへと視線を向けた。
「騒がしくして申し訳ない。仕事柄か、どうも声が大きいようだ」
「ふふ、大丈夫でしたよ。いつもお忙しそうですね、ダドリーさん」

「これでも、だいぶ落ち着きました。病院のほうこそ患者が増えて大変でしょう」
「似たようなものです。数日前に比べたらよくなりました。ダドリーさん、今日はお仕事ですか？」
「警備隊の一部が退院できそうだと聞きまして」
「あら、耳が早いですね」
「それも仕事のひとつですから。面会することはできそうですか？」
「大丈夫だと思いますよ。一応、私も同席しますね」
「ご協力、感謝します」

　ウルスラ病院３１８号室――
「なるほど……隊員たちが集められ、上官から直接、手渡されたわけだな？」
「はい」
　金色の髪の女性が、はっきりと答えた。
　後遺症はあるらしいが、もう話しているだけなら、影響は感じられない。
　彼女はベッドに腰掛けて、ダドリーは向かい合う形でパイプ椅子に座っていた。
「そのとき、拒否した者は？」
「いませんでした。命令を疑っていては私たちの組織は成り立ちません」

「ふむ」
　病室の扉が開かれる。ガラガラと台車を押して、ナースがひとり入ってきた。
「こんにちは～。ミレイユさん、お昼ですよ～」
　もうそんな時間か――とダドリーは腕時計に目を落とした。
　セシルが声をかける。
「おつかれさま、シロンさん」
「あ、セシルさん、おつかれさまです～!!」
「ここは、私がやっておくわ」
「だいじょうぶですよ～、まかせてください！　ミレイユさん、お食事で～す！」
　差し出されたトレーには、特別な治療なのかと思うくらい小さな器に、少ない食事が載っていた。
　ミレイユが眉をしかめる。
「…………いただきます」
　しかし、不服など言わずに受け取った。
　ちょっと待って――とセシルが止（と）める。
「シロンさん、これシズクちゃんのぶんじゃない!?」
「あれ？　ああ、間違えちゃいました～!!」

「では、私のは……？」
「あはは、こっちです、こっちです。ごめんなさ～い！」
「……シロンさん、本当に大丈夫？」
「もちろんです、セシルさん！　いつまでも失敗ばかりしてられませんよ～」
　ダドリーは捜査手帳を開く。
（ふむ……明らかに子供用のメニューを出されても、文句ひとつ言わないか。彼女の証言は、あるていど信用してよさそうだな）
　さらさら、とメモを書きこんだ。
　パイプ椅子から立ちあがる。
「では、このへんで失礼するとしよう。ミレイユ准尉、調査書作成の協力、感謝する」
「もうよろしいのですか？」
「入院患者の食事を邪魔するつもりはないのでな」
「わかりました……なにか気になることがあれば、またいくらでも聞いてください。司令部からも、可能なかぎり捜査に協力するよう言われています」
「了解した。それでは」
　ダドリーが敬礼し、ミレイユもベッドに腰掛けたままではあるが、敬礼を返した。

病室を出ると、一緒に退室したセシルが尋ねてくる。

「これで終わりですか?」

「ええ」

「そうですか。ダドリーさんは、お昼はどうされるんですか?」

「昼食か……とくに考えていないが……」

「ふふ、警察の方って、みなさんその調子ですね。ちゃんと三食を規則正しく取らないと、体を壊してしまいますよ」

「これは、面目ない」

思わぬところで注意されてしまった。

たしかに、忙しいと食事を抜くことも多くなる。いざというときのためにも、できるときは規則正しい食生活を心がけるべきだろう。

セシルが優しげな笑みを浮かべる。

「ふふ……ロイドもすぐ食事を抜くんですよ。無理しないように言ってるのに……ガイさんも同じでした。一生懸命なのはわかるのですけれど」

「そうですか。あいつらも……」

「でも、なにをするにも健康でないと。そのために、食事は大切だと思うんです」

「心に留めておきます」

「ダドリーさん、よかったら《レクチェ》で、ご一緒しませんか?」

「え……?」

「私も、今から休憩に入りますから」

「あ、いや、私ですか……?」

「もしかして、急ぎの用事がありましたか?」

「いえ、今日は本当は非番なので」

民間企業風にいえば、休日出勤とかサービス出社とか、そういう形だった。

だからこそ、市街を離れて病院まで来ることができたという面もある。

ダドリーは思案した。

(ひとりでサンドイッチでも食べたほうが早く食事を終えられるが……このセシル・ノイエス嬢は、ウルスラ病院の看護師チーフで、今回の被害者たちと長く接している。思わぬ情報が得られるかもしれんな)

「ふふ、もしかして、またお仕事のことを考えてますか?」

「あ、その……」

「仕方ありませんよね、警察官なんですから」

「……そうですね。でも、お食事はご一緒させてもらえますか」

「はい」



ウルスラ病院オーベルジュ《レクチェ》——

ダドリーは、セシルと同じ〝特製ビーフシチュー〟を食べた。彼女がお勧めするだけあって、野菜が豊富で、味もなかなかのものだった。

食後のコーヒーも文句なしだ。

セシルが微笑みかける。

「どうでしたか？」

「美味しかったです。それに、いろいろと知らなかった話も聞けましたし」

「お役に立ちますか？」

「捜査に直接関係があるかはわかりません……しかし、こういったことの積み重ねが大切だと思います」

症状の経過や、患者たちの精神状態や、効果のあったケアなど、有意義な情報だといえる。

「ふふ……よかったです」

笑顔の温かい女性だな、とダドリーは思った。

そのとき、隣の席で甲高い声があがる。

「きゃ～、このケーキ美味しいわ～‼　リンも食べればいいのに♪」

「いいっての。私が甘いの苦手なの、エオリアだって知ってるだろ？」

「こんなに美味しいのに～。この味が楽しめないなんて、リンってば可哀想～」

「また太るよ……？」

「ひどい！　お姉さん、泣いちゃうわ！」

騒がしい。

ダドリーは眉をひそめた。

（リンにエオリア……クロスベルの遊撃士たちか……）

警察こそが市民を守る組織だというプライドを持っているので、『民間人の保護』を掲げる民間団体——遊撃士教会（ブレイサーギルド）には強い対抗心を抱いているのだ。

とはいえ、病院で揉めるつもりはないが。

彼女たちの会話が聞こえたのか、セシルがメニューを見せてくる。

「ここのお店、ケーキも美味しいんです。カロリー控えめでも味を落とさないのがポリシーだとか」

「いや、私は甘いものは……」

「苦手ですか？」

「そ、そうですね。甘くないケーキならいいのですが……」

「くすっ……あ、ごめんなさい。ちょっと思い出したことがあったもので」
「思い出したこと？　なんですか？」
「昔のことです。聞いても、お役には立たないと思いますけど……」
「どんなことですか？」
「本当に、たわいない話ですよ――私、初めて大きなケーキを作ったとき、レシピを間違えてしまって……まったく甘くないケーキになっちゃったんです。むしろ、しょっぱいくらいの！　それなのに、味見したガイさんは、美味しいって言ってくれて」
「……あいつらしいな」
「ふふ、てっきり、優しさからお世辞を言ってくれたんだと思ったんです。ところが、本気で美味しいと思ったみたいで」
「え？」
「なんと、上司のお誕生日に持って行っちゃったんですよ」
「そ、それは……あいつらしいな！」
「うふふ……びっくりしちゃいました」
「大丈夫だったんですか？」
「そのときの上司は、セルゲイさんでしたから。結局、アリオスさんと三人で、ぜんぜん甘くないケーキを食べたみたいですよ」

「なるほど……」
　セシルが作ったのだと嬉しそうにしているガイを前に、微妙な味のケーキを黙々と食べるセルゲイとアリオスの姿が目に浮かぶ。

「どーだい、この甘くないケーキは！　イケてるだろ!?」
「お、おう……まぁ、斬新ではあるな……」
「…………うむ」

　思わず笑いがこみあげた。
　あまり表情を出さないダドリーだが、唇の端が引きつってしまう。
　セシルはころころ笑っていた。
「そういえば、ちょうど、この時期だったかしら……？」
「ん？　セルゲイさんの誕生日ですか？」
　ダドリーは手帳を開いた。
　わざわざ日付に丸を付けるようなことはしていないが、警察関係者のプロフィールは控えてある。

「本当だ。今日だったのか……」
「あら、それじゃあ、お祝いしたいですね」
「うーむ……」
　特務支援課も忙しいだろう、とは思うが――
（忘れて過ぎていたならともかく……気付いたのに、なにもしないのは落ち着かないな）
　セシルが珍しく身を乗り出す。
「ロイドたち、パーティとかするのかしら？」
「まさか。仮にも警察署で……いや、支援課（あいつら）のことだからな」
「ふふ……ロイドもお世話になってるし、急患が入らなければ、夕方にお祝いを持って行くくらいしようかしら」
「……そうですね」
「なにかするのか、ロイドに聞けるといいのだけれど……あ、そろそろ、休憩の時間が終わりみたいです」
「それでは、私も失礼します」
　ダドリーは病棟に戻っていくセシルを見送る。
　ふと、隣の席を見ると、難しい顔して書類と睨めっこしているリンの横で、エオリアが三つ目のケーキに手をつけていた。

「うふふ～♪　低カロリーだから、だいじょうぶ～♪」
（それは無理だ！）

　クロスベルに戻ったダドリーは、百貨店《タイムズ》に立ち寄った。
　中央広場にあり、ふたつの針がぐるぐる回る看板が目印の総合小売店で、高級品から日用雑貨まで幅広く取り扱っている。
　入口から階段へ向かう棚に、みっしぃグッズが売っていた。『プレゼントにも最適！』とポップにはあるものの。
（うーむ……さすがに、これをセルゲイさんにプレゼントするのは、ありえないな）
　二階にあがり、いつも利用している靴屋に顔を出した。
　この店では、年に何度か革靴を仕立てている。
　仕事柄、すぐに靴がダメになってしまうからだ。同僚にはスニーカーを履く者もいるが――捜査官ならスーツと革靴だろう、とダドリーは信じている。
　店主のハンソンが、にこやかな笑みで迎えた。
「おおっ、いらっしゃいませ、ダドリー様。また新しい革素材が入荷しました。ぜひ見ていっ

てください」

「ほう……」

「どうですか、この革の艶は？　帝国方面から入ってきたばかりの品でして。なかなか珍しいですよ」

「むむ、たしかに……この革でオーダーメイドの革靴を作ったら……あ、いや、今日は知り合いへの贈り物を探しているところでな」

「贈り物ですか？　サイズは、おいくつでしょうか？」

「それは……」

　手帳を開いてみたが、セルゲイのプロフィールに足のサイズまでは書かれていなかった。ため息をつく。

（さすがに、そこまでは調べてなかったか……足に合わせて仕立てた革靴を履いたときの、あの雲のうえを歩くような心地よさを、セルゲイさんにも味わってもらいたかったが！）

　残念ではあったが、当てずっぽうに用意できるものではない。

「すまん。邪魔したな……また寄らせてもらう」

「お待ちしております」

　ダドリーはアクセサリーなどを扱っているコーナーを見てみることにした。

「うーむ……」

　並んでいる商品に視線を巡らせる。

　ネクタイやタイピンは『肌身離さず』という意味合いから、恋人が贈る物らしい。衣服なども同じだ。

　ハンカチは『別れ』の意味があるのだとか。

　時計は『勤勉をうながす』という意味があるらしく、目上に対しては失礼になる。

「ええい！　意味がない贈り物はないのか⁉」

「お客様、いかがなさいましたか？」

　店主のベイカーが声をかけてきた。孫もいるという初老の男だ。

「いや……職場の上司が誕生日なのでな」

「なるほど、ダドリー様のご職業でしたら、署名される機会も多いでしょう。万年筆などはいかがですか？」

「万年筆か……なるほど、さすがだな」

「畏れ入ります。種類はいろいろありますが……これなど、熱烈な愛好家がおり、あのクロスベル国際銀行の総裁ディーター・クロイス様もお使いだとか」

「ほほう」

「お値段は、それなりですが」

「ふむ……なに、これくらいの手持ちはある。包んでくれ」

「有り難うございます」
初老の男が、うやうやしく頭を垂れた。

プレゼントを持って、ダドリーは特務支援課のビルへと向かった。
ロイドたちは飛び回っているが、課長であるセルゲイは、支援課ビルにいることが多い。
玄関扉を開ける。
ソファーの置かれた応接スペースには、巨大な白狼が寝そべっていた。
「グルル……ゥ……」
ツァイトが片目を開いてダドリーのことを睨み、また目を閉じる。
（……入ってもいい、ということか？　番犬というには強烈すぎますよ、セルゲイさん）
「失礼する」
ダドリーが特務支援課のビルに入ると、厨房になっている部屋から赤毛の青年——ランディが「ん？　お客さんか？」と顔を出した。
「げっ⁉」
という声をあげて、げっ⁉　という顔をして、すぐに引っこむ。

「うおっ、お、おい！　ロイド！　やばいぞ……」
「……えっ⁉　ダドリー捜査官だって⁉」
そんな会話が聞こえてきた。さらに、女性陣の声も。
「げっ……という感じですね……」
「うーん、ちゃんと話せばわかってくれるんじゃないかしら？　悪いことをしてるわけではないのだし」
「ねーねーロイド、どうしたの？」
ティオとエリィと、幼い女の子の声まで聞こえてきた。
ダドリーは眉をひそめる。
（やれやれ、なにをしているんだ、支援課の連中は？　セルゲイさんにプレゼントを渡して早く帰るか……）
課長室へと足を向けた。
そのとき——
エニグマの着信音があがる。
ダドリーは反射的に胸元に手をやったが、この音は自分のものではない。
厨房からロイドの声が聞こえてきた。
「はい！　えっ⁉　ああ……そうか。わかった……いや、それが支援要請なら、俺たちは

受けさせてもらうよ！　場所を教えてくれ。詳しいことは依頼者から聞く」
　通話を終えたロイドと、支援課の面々が厨房から出てきた。
「おつかれさまです、ダドリー捜査官！　すみませんが、今から――」
「事件か、バニングス⁉」
「はい！　〝いなくなった飼い犬を探して欲しい〟という支援要請です！」
「ッ⁉　い、犬か……」
「犬です。行ってきます！」
　ロイドが走って玄関へと向かう。
「あ、ああ……」
　さすがに休日を犬探しに捧げる気にはなれないダドリーだった。
　ティオとエリィが、ロイドに続く。
「……どんな犬でしょうか？　わたし的には、まふまふできる長毛の大型犬が好みですが」
「ん～、私は部屋の中で飼える小型犬が好みかしら？」
　最後に「しゃあねえな～」と文句を言いつつランディが出ていく。
「気をつけてね～」
　厨房から顔を出して、ライムグリーンの髪の幼い女の子が小さな手を大きく振っていた。

　ロイドたち四人が出動し、支援課ビルにはダドリーと、その幼い女の子――キーアだけが残された。
　ずっと寝ているツァイトもいるが。
　キーアの大きな瞳に、じっと見つめられる。
「えへへ、こんにちは！」
「うむ……留守番か。大変だな」
「キーアはへいきだよ」
「いつも、こうなのか？」
「ん～、だいたいこんなかんじ。ロイドたち忙しいから」
「そうだな……」
　やはり子どもを育てる環境としては不適切ではないか――と感じるダドリーだが、それでも、当のキーア本人がロイドたちの元に留まることを望んでいるらしい。
（……そういえば、バニングス兄弟も似たような境遇だったか。どんな場所が幸せかは人それぞれかもしれないな）

キーアのことを見つめていると、『?』を浮かべて首をかしげられた。
「どうしたの？　ダドリー、今日もぶすっとしてるね」
「ぐっ……別にずふっとしているわけではない！　相変わらず年長者に対する礼儀がなっていないようだな」
「えへへ、なにかご用だった？」
ダドリーの抗議は、さらりと流された。
ぐぬぬっと歯がみするが、子どもの言うことだ。こらえておく。
「今日は、セルゲイさんに渡すものがあってな」
「かちょー？　おでかけしてるみたい。帰ってくるのは夕方かな」
「ふむ、本部だったか」
「うん」
子どもの世話は大変なばかりだろうと考えていたが、まるで受付のようだった。実は意外と役に立っているのかもしれない。
「セルゲイさんは、ご不在か。仕方がない……渡す物は机にでも置いておくことにしよう」
「うん、わかった！　かちょーに言っておくね！　じゃあ、キーアはお料理があるから」
「ん？　待て。お前がひとりで料理をするというのか？」
「うん！　かちょーが帰ってくる前に作らないとね！」

にこにこと笑顔でキーアが厨房に入る。
中を覗きこむと、いくつもの食材が作りかけで置いてあった。
そういえば、ロイドたちは料理中に支援要請を受けて出動したのだったか。
「んと、油物は後にしないと冷めちゃうから……先にスープかな」
キーアが包丁を手にする。
幼い彼女に、厨房の調理台は高すぎるようで、背筋を伸ばして身を乗り出すような格好で野菜を切りはじめた。
ダドリーはあわてて止めに入る。
「ま、待て……子どもが刃物を使うなど危ない」
「ほえ？　へいきだよ」
「すこしは言うことを聞かんか！」
「……でも、今のうちにやらないと、パーティーに間に合わないし」
「パーティーだと？」
「うん！　かちょーのお誕生日パーティーだよ」
「あいつら、勤務時間に……!!」
「料理したらダメだったの？」
「あ、いや……待機中に料理を禁止するという規則はないが、常識的に考えてだな……」

せいぜい、買ってきたケーキを食べるていどにするのが、普通ではないか？　まったく特務支援課は型破りだ。

キーアが大きな棚の上段へと手を伸ばす。指先をぷるぷるさせるが、届かないようだ。

「う〜〜〜……」

「どうした？」

「お塩が切れちゃってるの。前に買っておいたのが、棚の上にあるんだけど……」

「これか？」

当然ながら、ダドリーにとっては、なんでもない高さだった。紙袋を取ってやる。

「うん、これ！　ありがとー、ダドリー!!」

「まったく……子どものしつけ方について支援課(あいつら)にひと言、言っておかねばな……」

「じゃあ、料理しちゃうね」

キーアが小さい体にもかかわらず、テキパキと準備を進めていく。

「バニングスたちが帰ってきてからにしたらどうだ？」

「だって、いつ帰ってくるかわからないし……」

たしかに、いなくなった犬を探すなんて、いつになるか。

ダドリーはこめかみを押さえて、ため息をついた。

「仕方ない……私も手伝おう」

「え？　ほんと!?」

「子どもが、ひとりで料理をするなど、危なっかしくて見ておれんのでな」

スーツを脱いで、シャツの袖をまくる。ロイドのエプロンを借りることにして前にかけた。

きらきらとキーアが瞳を輝かせる。

「ダドリー、やっさしぃーー!!」

たいへん不本意ながら、ダドリーは料理を手伝うことにした。

手を洗って準備を終える。

「はじめは、なにを作ればいい？」

「なにが得意なの？」

「と、得意な料理か……」

正直なところ、それほど慣れてはいないのだが、子どもの手前、そんなことは言えない。

「……どんなものでも任せるがいい」

背筋を冷や汗がつたった。

ん～、と考えてから、キーアがレシピを指さした。

「じゃあ、この《フレッシュサンド》を作ってもらえる？」

「うむ、これなら♪　あ、いや……なんでもない。まかせておくがいい」

思わず明るい声が出てしまった。とりつくろうように、ことさら重々しく答え、ぐいっと胸を張る。

キーアが笑顔を浮かべた。

「ありがと～!!」

期待に応えるべく調理をする。

ゆで卵を作るために、まずお湯を沸かす。その間に、きゅうりを刻んだ。

温めた卵をナイフで細かくし、きゅうり、マヨネーズ、塩、こしょうと混ぜ合わせる。

焼きあげたトーストに乗せ、ハムとレタスもはさみこむ。

完成だ。

「よし、上出来♪　あっ……う、うぉほん！　ふん、これでいいのか？」

また弾んだ声をあげてしまった。

すこしだけ頬が熱くなる。

くいっ、とメガネを直した。

キーアが手をたたく。

「わぁ～、美味しそう♪」

「ふ、ふふ……まあ、当然だな」

子ども相手ではあるが、褒められて悪い気はしないダドリーだった。

「お前のほうは、どうだ？」

「んと、キーアはね、《薬膳麻婆豆腐》ができたとこ」

「なっ⁉」

いつの間にか、キーアの手によって完成度の高い麻婆豆腐ができあがっていた。

濃い赤色と香辛料の匂いが食欲をそそる。

子どもの腕前とは思えない。

むしろ、素人のレベルではなかった。

「こ、これは……なんということだ……」

「えへへ、じゃあ、次はね——」

「どんなものでも任せてもらおう！」

「ほんと⁉　じゃあ、《匠風オムライス》を作ってね！」

「ただのオムライスではなく、匠風に仕上げろという事なのか……!?」

「あ、無理そう？」

「むむ……い、いや、もちろん大丈夫だ！」

「えへへ」
　ダドリーはレシピを見ながら頑張ってみたが、とき卵を薄く広げたり、崩さずに巻くのは本を読んだだけでは難しかった。
　ぐしゃぐしゃになる。
「うっ、いかん……メガネが曇って……」
「え……ダドリー、だいじょうぶ?」
「これは……その……」
　オムライスを目指した別の料理ができあがってしまった。
　失敗料理というやつだ。
「ん〜と、どうしよう? 食べてみたら、意外と美味しいかも?」
「パーティに出す料理ではないな……仕方ない。これは、私が食べるとしよう」
「え、でも……」
「いいか、たとえ失敗しても、食べ物を粗末にするのはダメだ」
「わかった。じゃあ、ツァイトにあげようよ!」
「む……食べるだろうか?」
　ダドリーは充分に冷ましてから、ずっと寝ている白狼のところへ失敗オムライスを持っていった。



皿を持って現れたダドリーとキーアに、ツァイトが身体を起こす。

「グルル……」

「ツァイト～、ごはんだよ！」

「ガウッ」

「えへへ、〝美味しそうな匂いがする〟だってさ」

「まるで言葉がわかるみたいに言うのだな」

「わかるよ～」

「ふっ……そうか」

ダドリーはうなずいた。

子どもは夢があるものだな――と微笑ましい気持ちになる。

身を起こしたツァイトの前に皿を置いた。

ガフガフと食べはじめる。

「ツァイト、おいしい？」

キーアがにこにこしながら聞くと、白狼がひと声、鳴いた。

「ウォンッ！」

「へー、そうなんだ～。〝なかなか美味しい。この料理を作った者は才能がある〟だってさ！」

「あ、ああ……」

犬の食事を作る才能を褒められても、あまりうれしくなかった。

そもそも、失敗した料理だし。

ダドリーは、そっとため息をついた。

「よし、次こそ！」

そして、数分後――

キーアが気まずそうな顔をする。

「えっと……じゃあ、その《フライドフィッシュ》になれなかった料理は、コッペに」

「う、うむ……」

屋上へ行き、黒猫に失敗した魚料理を与えた。

「にやゃゃあ～‼」

「これは……喜んでいるのか？」

「にゃ～お」

食べ終えたコッペが、支援課ビルの裏へと消えた。

空になった皿と食べかすを片付けていると、すぐに猫が戻ってくる。

「にやぁ～～～お」

ころり、とダドリーの前に、黒色の石を落とした。

「なんだ？」
ゴロゴロゴロゴロ……とコッペが喉を鳴らす。
石を手に取った。
「もしかして、私に？　こ、これは《時》系統のクオーツか⁉　しかし、形は同じだが、なにか違うような……」
ふと思い出す――配備予定の試作品として見せられた新型エニグマのことを。
戦闘時の行動力を支援するクオーツに、似たようなものがあったはず。
「まさか、新型のクオーツなのか⁉」
「にゃおーん」
「この猫……何者だ⁉」
「にゃぁおお～ん」
コッペは満足そうに鳴き声をあげると、よく日の当たる屋上で、ころりと丸くなった。
ぬぬぬ、とダドリーはうなる。
（売られてもいないクオーツを入手してくるとは……もしや支援課の活躍の陰には、この猫の働きが⁉）
「……ふっ……まさかな。偶然だ。このクオーツは遺失物として届けておくとして……一応、猫のことは一課の書類に追記しておくか」

後日、引き取り手の現れなかった《行動力1》のクオーツは、ダドリーの手に戻り、配備されたばかりのエニグマⅡに装着されるのだった。

キーアの指示に従って、あれこれパーティーの準備をしていると、玄関のほうから声がした。
「こんにちはー」
「む？　来客のようだな」
ダドリーたちが厨房から顔を出すと、玄関口には警備隊の制服に身を包んだ少女の姿があった。
「わあい、ノエルだ～」
キーアが笑顔で迎える。
「こんにちは、キーアちゃん！」
「ふむ……君は、ノエル・シーカー曹長だったかな？」
問いかけると彼女は目を丸くした。

「あれ？　もしかして、捜査一課のダドリー捜査官でいらっしゃいますか⁉」
「ああ、そのとおりだ」
「ご苦労様です！　……って、ここ支援課ですよね？　なにをされてるんでしょうか？」
「見てわからんのか？」
ダドリーはスーツを脱いで、エプロンを巻いている。
ノエルが首をかしげた。
「ちょっとわからないです……どうして、一課の捜査官が、支援課でキーアちゃんと料理を？」
「……そうだな。どうしてだろうな？」
ダドリーのほうが教えて欲しいくらいだ。
「ふふ、なかなか面白いことになっているみたいね」
ノエルの後ろから、クールで理知的な雰囲気の女性が姿を見せた。
やはり警備隊の制服を着ているが、左胸の階級章が将校であることを示している。
今度はダドリーが目を丸くする番だった。
「ソーニャ・ベルツ副司令⁉」
「お邪魔してもいいかしら。アレックス・ダドリー捜査官？」
「警備隊の実質的なトップが、警察のいち部署である支援課に……まさか、なにか事件が⁉」
「ふふ、そういうわけではないの」
「ロイドたちは支援要請で出動していますが……？」
「ええ、知ってるわ」
ソーニャの言葉に、ノエルが説明を添える。
「あたしたち、警備隊本部の近くでロイドさんたちに会って、誘われたんです」
「セルゲイの誕生日パーティーをするらしいわね。しかも、サプライズなんですって？　ふふ、楽しそうじゃない」
警備隊副司令ソーニャ・ベルツが、らしからぬ少女のような笑みを浮かべた。
おおっ、とノエルが驚いた顔をする。
そういえば……とダドリーは思い出した。
（……セルゲイさんと、ソーニャ副司令は……ならば、私がとやかく言うことではないな）
ひとつ、うなずく。
「わかりました。パーティー料理の準備中なので、お茶くらいしか出せませんが、中で待っていてください」
「ふふ、おかまいなく」
「あたしにも手伝わせてください！　美味しそうな匂いがしてますね。もうケーキは買っ

てあるんですか？」
「えへへっ、ケーキも作るんだよ」
「えっ、手作りなの⁉」
「うん！」
　元気よく答えたキーアに、ダドリーは驚愕の声をあげる。
「おい待て、今からケーキ……だと⁉」
「そのほうが楽しそうだもん」
「しかし……」
「あら、大変そうね。私も手伝おうかしら？」
　ソーニャがうれしそうに袖をまくる。
　今度はノエルが声をあげた。
「ええっ⁉　副司令が⁉」
「あら……私だって、料理くらいできるわよ。まあ、ここ数年、ごぶさただけど」
　そこに、さらに来客があった。
「あの……すみません……」
「む？」
　もじもじと気後れした様子で、黒髪の美しい少女が姿を見せた。

　ダドリーは我が目を疑う。
「なっ⁉　もしかして……リーシャ・マオ嬢か⁉」
　劇団アルカンシェルの看板スターのひとりである。
　リーシャが困ったような顔を浮かべた。
「やっぱり、ご迷惑なんじゃ……」
　彼女の背を押すようにして、栗色の髪の少女が入ってくる。ウルスラ病院の看護師セシルだった。
「ふふ、ロイドが大丈夫って言ってたから平気よ」
　華やかなふたりが来たら、部屋の空気まで変わったように感じられる。
　リーシャが、ぺこりと頭をさげた。
「すみません……セシルさんから、ここでお祝いのパーティーをやるからとお誘いを受けまして……」
「うふふ、すこし前に、リーシャさんに助けてもらったことがありましたから」
　はたはたとリーシャが左右に手を振る。
「いえ、そんな！　たまたまロイドさんたちと一緒にいただけです」
「だとしても、助けてもらいましたから。いつか、お礼をしたいとロイドと話してたところだったんです」

「あれは、むしろ私のほうが、ロイドさんにお礼を言いたいくらいで……」
　この調子だと、延々と同じことを繰り返しそうだ。
　ダドリーは割って入る。
「だいたい話はわかりました……つまり、リーシャ・マオ嬢も、セルゲイさんの誕生日パーティーに来たんですね？」
「はい。支援課のみなさんには、お世話になってますから、お祝いができたらいいな、と思いまして」
「なるほど……」
　プライベートでの参加であれば、ダドリーの立場から、どうこう言うべきではないだろう。
　セシルが確かめるように尋ねてくる。
「ロイドが誘っても大丈夫って言ってたし、きっとセルゲイさんも喜んでくれますよね？」
「まぁ、経緯はともかく……リーシャ・マオ嬢に来てもらったら、普通はよろこぶでしょう」
　セシルとリーシャが安堵したように表情をやわらげる。
　ノエルが元気よく腕まくりした。
「よし！　人数も増えてきたことですし、じゃんじゃん料理しちゃいましょう！」
　セシルとリーシャも手伝いを申し出てくる。

「お料理の最中でしたか？　よかったら、手伝わせてください」
「私もなにか……炒飯とか坦々麺とか、東方系の家庭料理なら得意です」
　キーアが瞳を輝かせた。
「わあい！　みんなでがんばろ～‼」
　小さな手をにぎりしめて、号令をかけた。
「おー‼」
　ノエルとセシルが、ノリ良く合わせる。
　リーシャとソーニャは微笑んでいた。
　騒々しくなったせいかツァイトが起きて、階段をのぼっていく。
　ダドリーは皿を並べたり、食材が足りないと言われて買い出しに行ったり、息つく暇もないほど働いた。

　夕方――
「ただいま～」
　ロイドが帰ってきた。エリィとティオとランディも一緒だ。

そして、それぞれが驚きの声をあげた。

「パーティーの準備が終わってる⁉」

「いい匂いがするわね」

「……すごい料理がならんでます」

「おいおい、まるでパーティー会場みたいじゃねえか⁉」

料理をテーブルにならべていたダドリーは、咳払いをした。

「みたいではなく、ここはパーティーの会場だ。企画したのは、お前たちだろうが」

キーアが厨房から飛び出してきた。

「ロイドー‼」

「ただいま、キー……おいおい、手が……⁉」

幼い女の子の手は、なにやら白いものまみれになっていた。

しかし、ロイドに向かって突進する勢いは止まらない。

べちゃり！

「うっ……キーア……」

「あれ？」

ロイドの服に、べっとり白いものがついていた。

キーアのほうも鼻や口元に、べたべた白いものをつけている。

ぺろり、と舐め取った。

「えへへ～、甘～い♪」

「……キーア、これ生クリームか？」

「うん！」

服をクリームでべたべたにされたロイドだったが、優しくキーアの頭をなでる。

「今日は、みんなでパーティーの用意をする予定だったのに……ごめんな。こんなに遅くなっちゃって」

「ううん！　お仕事だからいいの。へいきだよ！」

けなげな様子に、ティオが涙ぐんで、キーアのことを抱きしめる。

「……キーア！」

「んあ？　ティオにもクリームついちゃうよ？」

「いいんです。そんなの気にしません」

「キーアちゃん、お料理とか大変だったでしょう？」

エリィの言葉に、キーアが首を横に振る。

「みんなが手伝ってくれたから！」

厨房から、ノエル、ソーニャ、リーシャ、セシルが顔を出した。

それぞれが、ロイドたちに、ねぎらいの言葉をかける。

ランディがテンションを跳ね上げた。
「うおっ⁉　リーシャちゃんに、セシルさん⁉　本物か⁉　それとも夢か幻か⁉」
ロイドたちは驚いたり、お礼を言ったりと、大変だった。

ようやく落ち着いた頃――
玄関から、ひとりの青年が入ってきた。
「やれやれ……大騒ぎだね。僕も仲間に入れてもらっていいのかな？」
「あっ、外で待ってたのか？　もちろん歓迎するよ」
ロイドが迎え入れたのは、中性的な美貌と、皮肉めいた笑みが印象的な青年だった。
「…………ぬおっ⁉　貴様はワジ・ヘミスフィア⁉」
ダドリーは一瞬、言葉を失ってしまう。どうにも驚くことの多い一日だ。
「やあ、お久しぶり。ダドリー捜査官」
ワジは不良グループ《テスタメンツ》のリーダーである。
「支援課は、一応、警察の組織だ。どうして、お前がここにいる？」
ティオが小さな声で「……一応は余分では？」とつっこんだ。
それはともかく、ワジが応じる。
「どうしてって、彼に誘われたからさ」

「む……どういうことだ、バニングス⁉」
ダドリーが睨むと、ロイドは当然という顔をしていた。
「支援要請を受けて探してた飼い犬なんですけど、旧市街のほうへ逃げてしまって……隠れるところが多いから、これは大変だと思ってたら、ワジが協力してくれたんです」
ワジが話を引き取る。
「旧市街は野犬同士も縄張りを持ってるからね。迷いこんだ犬の逃げこむ先は、それほど多くないのさ……その犬を説得したのは、ティオだけどね」
「……話せば、わかってくれました」
納得できるような、できないような話だ。
「協力してもらったのは、確かなのだろう……しかし、不良グループのリーダーを招くなど――」
「あの、ダドリー捜査官。誰であろうと、この場に来てくれた人を追い返すというのは、お祝いに水を差してしまうことになりませんか。それに彼なら、おかしなことはしないと思います」
そう言ってかばったのは、意外にもノエル曹長だった。
（……もしかして、知り合いなのか？）
ダドリーは納得しかねるが、そもそも、パーティーの主催者はロイドだ。

そして、なにも言わないということはソーニャ副司令までワジの同席に異論ないのだろう。

ため息をついた。

「まぁ、パーティーとは、こういうものか……」

ワジが肩をすくめる。

「ふふ……なかなか異色の取り合わせだね。捜査一課のエリートと、警備隊の人たちと、ウルスラ病院の看護師さんと、アルカンシェルのスターかい？　そのうえ、不良グループのリーダーまで呼ばれて、警察官のお誕生日会だなんて……こんな妙なパーティー、いくら僕でも経験ないよ」

楽しそうに笑っていた。

まったくもって非常識だ、とダドリーは思う。

ロイドはクリームまみれの服を着替えに自室へあがり、エリィとティオはキーアの顔をぬぐってあげる。

子どもとは思えないほどしっかり者に見えたキーアだが、世話されている姿は、まだまだお子様だ。

そして、予定通りの時刻に、本日の主役が姿を見せる。

特務支援課の課長、セルゲイが帰ってきた。

会議スペースの大きな長机には、いっぱい料理がならんでいる。

ホワイトボードには『HAPPY BIRTHDAY』の文字。

そして、笑顔で出迎えた面々は——支援課のロイド、エリィ、ティオ、ランディ、キーアと、警備隊のノエル曹長、ソーニャ副司令。劇団アルカンシェルのリーシャ・マオ。ウルスラ病院の看護師のセシル。さらに、テスタメンツのワジだ。

もちろん、捜査一課のダドリーもいる。

いつの間にか、ツァイトも戻ってきていた。

タバコをくわえたまま、セルゲイが唖然として、つぶやく。

「……なんだ、こりゃあ……？」

「かちょー、お誕生日おめでとー!!」

キーアが最初に、お祝いの言葉を投げかけた。

みんなも口々にお祝いする。

セルゲイが目を白黒させていた。

ソーニャが、グラスを手渡す。
「乾杯くらいしたら？」
「あ、ああ……」
みんなが言葉を待っていた。セルゲイが困ったような笑みを浮かべる。
「クク……数日前から、なにかやってるとは思ってたが……やれやれ、この忙しいのに、元気なやつらだな」
ロイドたちが照れ笑いで返した。
セルゲイがグラスを掲げる。
「誕生日を祝うような歳でもねえが……ま、礼は言っておこう」
みんなで乾杯した。
ロイドたちはノンアルコールにしておく。ランディなどは残念そうだったが。
たくさんならべられている料理に、セルゲイが感嘆をあげた。
「ほう、こいつはすごいな……誰が作ったんだ？」
キーアが説明する。
「んとね、その匠風オムライスはノエル！　こっちの龍老炒飯がリーシャで、あっちの煮出し魚鍋はソーニャだよ！」
「……煮出し魚鍋か」



セルゲイは唇の端をゆるめ、小皿に分けて、煮出し魚を口にした。
「……懐かしい味だな」
「ふふ、本当に覚えてるのかしら？」
ソーニャが苦笑していた。
ワジがテーブルの端に、酒瓶とグラスをならべる。
「人が多いし、僕はバーテンの真似事でもしようかな」
「ちょっと、ワジ君、ここ警察署だよ⁉」
「わきまえてるよ、ノエル。ノンアルコール・カクテルも作れるさ。これなんかオススメだよ」
手際よく作られたのは、《ベルベリージュース》だった。
アルコールは使われていない様子だから、と飲んでみて、ノエルは目を丸くする。
「す、すごい！　美味しい……とっても甘いのに、すっきりしてて」
「ふふ……そうだろ？」
キーアが、ロイドに声をかける。
「ねえ、そろそろ、ケーキを出そうよ！」
「えっ⁉　ケーキまで、ちゃんと作れたのか⁉」
「えへへっ！　セシルが手伝ってくれたもん。キーアもがんばってかわいくしたんだよ」
「そいつは楽しみだな。よし、丁寧に運んでこよう」

「俺も手伝うぜ」
ロイドとランディで厨房からテーブル中央へ誕生日ケーキを運んだ。
キーアが書いたというメッセージ入りの手作りケーキを前にして、セルゲイが目頭を押さえる。
「クク……まったく、おまえたちは……」
「すごいです。プロ顔負けですよね」
リーシャが褒めると、セシルが頬を赤くした。
「前に失敗してから、何度か作ってみたから……少なくとも、味のほうは普通だと思うわ」
「普通じゃない味のケーキを作っちゃったんですか……？」
「甘くないケーキになっちゃったことがあるの」
セシルが小さく舌を出す。
「そういや、そんなこともあったな」
昔のことを思い出したらしく、セルゲイが苦笑していた。
玄関がノックされる。
ダドリーは振り向いた。
「むっ……バニングス、まだ来客があるのか？」
「え？　いえ、俺の知ってるかぎり、これで全員だと思いますけど」

「では、誰だ？」
　ダドリーが玄関扉を開けると、マイクを持ったグレイス記者と、カメラを構えたレインズが入ってきた。
「こんばんはー‼　クロスベル通信（タイムズ）です！」
「帰れ」
「うわっ⁉　ダドリー捜査官……どうして支援課に⁉　まさか、出向ですか？」
「わ、私が支援課に出向するものか！　今は記者など入れるわけにはいかんのだ」
「えぇー⁉」
「まったく、どこから嗅ぎつけてきた？」
「ふっふっふっ……記者としての直感が、なにかあると……こう、ピュキーンと」
「とにかく帰れ」
「うあ～、わかりました！　じゃあ、記事にしませんから！　その交換条件でどうですか⁉」
「つまり……追い返したら記事にするわけか……その約束、守ってもらうぞ？」
「もっちろん！」
　ずいずいと奥に入ってくる。
「うふふん♪　あ、セルゲイ課長、お誕生日、おめでとうございます！　つまらないもの

ですけど、これ」
「お、おう……そっちは、最近、大活躍じゃねえか？」
「いや～、新市長体制になって、あれこれ大激変ですから書くことが多くて多くて」
「だろうな。それなのに、こんな小さなことに時間を使っていいのか？」
「ん～、なにがあっても、支援課からは目を離さないほうがいい気がするんですよね……ま、私の記者としての勘ですけど」
「ククク……期待に添えるといいがな」
「うふふふっ……」
　記者魂の宿った瞳が、めらめらと燃えていた。
　盛りあがっているグレイス記者にカメラマンのレインズが耳打ちする。
「あの～、グレイス先輩……」
「なに、レインズ君？」
「これ記事にしないって約束なら、写真は撮らないほうがいいですよね？」
「うーん、たしかに、ここで撮影すんのは、ちょっとね……でも、せっかく来たのになにもしないんじゃ、甲斐がないでしょ？」
「いや、僕はべつに……」
「そうだ！　集合写真を撮りましょうよ！　プリントしたら感光クオーツごとセルゲイ課

長に渡すわ。それでどう⁉」

「ククク……まぁ、俺が決めることじゃねえな」

「どう⁉」

　今度はダドリーが尋ねられた。

　セルゲイが預かるのなら、文句はないが――

「やはり、ここはお前が決めるべきだろう、バニングス」

「俺ですか⁉」

　すこし考えてから、ロイドがうなずく。

「……うん……撮られたくない事情のある人は映らなければいいんだし、撮ってもらおう。こんなふうに集まれるのは、とても貴重なことだと思うから」

　エリィとティオも同じ気持ちのようだ。

「大切な思い出だもの、残せたらうれしいわ」

「……キーアが、がんばってくれたことも記録されますね」

「えへへっ！　写真とるの⁉　やったあ！」

　キーアが両手を挙げた。

　他の参加者たちもかまわないとのことで、みんなしてケーキの前にならんだ。

　レインズが、どこから持ってきたか脚立にのぼり、角度をつける。

「グレイス先輩、レフ板、もうちょい高くお願いします」

「ぐぐぐ……もう、これ以上は背が伸びないっての！」

「がんばってください。あきらめないのが記者魂だって、いつもグレイス先輩が言ってるじゃありませんか」

「うぐ～」

　撮影になった途端、上下の立場が逆転して、すっかりアシスタント扱いのグレイスだった。

　レインズがカメラを構える。

「いいですか、撮りますよ～、3、2、1、はい。ありがとうございました！」

　撮影が終わり、ほわっとした空気になる。

　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。

　懐から取り出して、カバーを開く。

「やあ、フラン……え？　なんだって⁉　そんなことになったら……くっ‼」

　ロイドの様子から、大変な事態が起きたことは、すぐ推測できた。

「ああ……わかった……すぐ現場に向かう！」
ロイドが通話を終える。
ダドリーはスーツの上着を羽織り、装備（インペリアル）を確認した。
「バニングス、今度こそ事件のようだな⁉」
「はい！　ジオフロントの扉が故障して開いたままになり、住宅街に多数の魔獣が現れているそうです！」
「なんだと⁉　捜査一課としても放っておけない事態だ。よし、特務支援課、合同強制捜査だ！　私についてこい！」
「了解‼」
「市民の避難もしないと」
エリィの言葉に、ティオがうなずく。
「……逃げ遅れた人の探索（サーチ）は任せてください」
「よっしゃ！　とっとと片付けようぜ‼」
ランディがスタンハルバードを肩にかついだ。
ノエル曹長が進み出る。
「あたしも協力します！　装備は最低限しかありませんが、市民の誘導ならできますから！」

「そうね……警備隊の軽装甲車なら、ジオフロントの魔獣にも対抗できると思うわ」
ソーニャ副司令が直々に承諾してくれた。
ダドリーはうなずく。
「願ってもない！　協力、感謝する！」
こんなときだというのに、ワジが動じることなくカクテルを作っていた。
「やれやれ……相変わらず落ち着かないね。まぁ、僕は帰りを待つことにするよ。まさか、これでお開きじゃないだろ？」
ロイドが笑みをこぼす。
「もちろん、できるだけ早く退治してくるよ……支援課ビルには、課長もツァイトもいるから大丈夫だと思うけど、セシル姉やリーシャたちを頼む」
「ja（ヤー）．他ならぬ君の頼みだ、引き受けよう」
セシルとリーシャが、心配そうに見つめていた。
「気をつけてね、ロイド。ケガしないで帰ってきて」
「ロイドさん、お気をつけて……」
「ありがとう！」
それから、ロイドはキーアの頭をなでた。
「ごめんな……ちょっと行ってくる」

「うん。がんばってね、ロイド！」
出動に際しても、セルゲイは黙って見ているだけだった。
なにも命令しない。
ただ、視線を交わして、互いにうなずく。
信頼しているのだとわかる。
これが支援課の流儀なのか――とダドリーは思った。
ロイドたちは自分で考え、自分が信じる道を全力で進でいく。
ダドリーのやり方とは違う。
しかし、彼らを認める気持ちは以前よりも強くなっていた。
ロイドが扉を開ける。
「さあ行こう！　みんな！」
仲間たちと表に出るロイドの後ろ姿に――ダドリーは、彼の兄ガイ・バニングスを重ねる。
「ふっ……いや、まだまだ遠いな。しっかりと私が指導してやらねば」
夜のとばりに包まれた街を守るため。
事件の現場へと走りだすのだった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

① 1名様
閃の軌跡Ⅳ
プレミアムグラスタンブラー

好評につき、シックでカッコいいタンブラーを
またまたプレゼント!!





② 3名様
『も～っと集まれ！ファルコム学園』
缶バッジ

大人気!!　オリジナル缶バッジを７個セットで
３名にプレゼント!
※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.100プレゼント係

１：お名前（ペンネーム可）
２：面白かった記事の番号→
　　つまらなかった記事の番号→
　　（記事一覧から１つずつ）
３：アンケート①月刊ファルコムマガジンを何号から読んでいますか?
　　アンケート②印象に残っている記事や漫画、小説作品はありますか？
４：希望するプレゼント番号
５：ご意見・ご感想など

記事一覧

１：近藤季洋社長インタビュー
２：vol.100記念お祝いイラスト
３：イースⅨ最新情報
４：も～っと集まれ！ファルコム学園
５：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
６：ファルコムニュース
７：暁の軌跡最新情報

応募締め切り　6月26日（水）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.100

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/